

韓石泉著 韓良俊編注 杉本公子・洪郁如編訳

韓石泉回想録

——医師のみた台湾近現代史

あるむ／2017年10月／406頁／2500円＋税



林 果顯

はじめに

二〇一七年に出版された『韓石泉回想録——医師のみた台湾近現代史』は、新しく発掘された回想録ではない。一九五六年、回想録の執筆者である韓石泉が自身の六〇歳の誕生日を記念して自费出版し、家族や友人に頒布した。ここから本書の歴史は始まる。第二版は、子息が韓石泉の三回忌を記念し、一部補訂したうえで自费出版したもので、発行部数もそれほど多くはなかった。子息の韓良俊が再度回想録を整理し、自ら詳細な注釈を書き加え、二〇〇五年から医学雑誌『健康世界』で連載をはじめ、二〇〇九年には出版社から正式に発行された。これが第三版である。二〇一七年に発行された日本語版は、第四版ということになる。杉本公子と洪郁如による編訳、一部の注釈を削除し、新たに韓石泉の友人による回想と、写真や家族略系図、台南市地図、年表、索引、解説、さらに訳者あとがきを加えている。以前の版本と比較しても多くの内容が追加されている。この

六〇年以上もの間に、本書がリレーのように重ねた歴史は、台湾人の声を伝えようとする韓石泉と家族の強い意志の現れでもある。では、二〇一八年の現在、半世紀も前の回想録を読みつぐ意味とは何だろうか。

一人の欧米式の医療知識・技術を身につけた医師として、韓石泉の人生を、いわば植民地エリート養成体系の典型例として想像することは難しくない。これは同時に、台湾の学界で長らく議論が重ねられてきた「植民地化」と「近代化」という二重の文脈下を彼が生き抜いたことを意味する。とはいえ、個人のレベルから見れば、西洋文化に接触した後の台湾人それぞれの人生はまた異なる道をたどっており、記録性豊かな回想録を通じてようやく多面的な歴史を理解することができる。この回想録には、韓石泉自身の学究、医学校進学後の恋愛模様、そして結婚式に関する様々な改革的な試みについて詳細に記録されている。この記録から、もともと中国的な伝統教育の中で育った少年が、西洋式の医学教育を受

け、いかに社会的なエリートとしての自己認識を獲得し、台湾社会に対して新たな基準を提示する存在として自らを位置づけていったのか、鮮やかに浮かび上がってくる。韓石泉の公私にわたる経歴を見れば、一種の台湾的な特徴とも言える、ここ百年間の社会において医師がおかれた特殊な位置も見てとれる。これは、台湾近代史を見ていくなかで、常に興味深い切り口となっている。

韓石泉はまた同時に、日本植民地統治と中華民国政府の統治を経験したひとりの政治的エリートでもある。彼はこのふたつの政権のもと、異なる政治手法に参加するとともに種々の対応を経験した。彼の経験は、台湾人が西洋的な「民主主義」の概念を学んだ後、異なる時代の中で「民主主義」の追求とその苦難がいかなるものであったかを、ある程度明らかにしている。興味深いのは、特に第二次世界大戦後の数年という厳しい制限のなかでも、日本統治期には政治的な主張が右派と左派に分かれていた人々も、ひとしく選挙活動に没頭していたことであ

る。課題山積する政権転換期において、なぜ台湾エリートは政治にたいして飽くなき情熱を抱き、彼らはまた自らがよりよい社会を作り出せることを信じ、ある種天真爛漫とした、また儂げな政治参加の雰囲気をもとっていたのだろうか。筆者は、この儂げな時代の雰囲気を理解することこそが、台湾近代史を読み解く重要な鍵のひとつであると考えている。そして本回想録は、あざやかにこの雰囲気を描いているように思う。以下、本回想録の筆者、回想者である韓石泉の生涯と本書の内容について、簡単に見ていきたい。

各章紹介

韓石泉は一八九七年、台湾に生まれた。一八九七年は日本の台湾統治の三年目にあたる。彼は植民地的な近代教育を受けるとともに、父が伝統的な私塾の講師であったために、伝統的な漢文教育も受けた。ごく短期的な就職の後、彼は台湾総督府医学学校へと進学、卒業後専業の医師となり、一九二八年には自ら経営す

る韓内科を開設した。彼は独立した医師になると同時に、政治運動にも関与した。彼は、一九二〇年代の台湾における重要な民族運動組織であった台湾文化協会に加入、台湾議会設置請願運動にも参加した。一九三五年、彼は熊本医科大学に留学、一九四〇年には医学博士の学位を取得、帰台し、引き続き医師として働いた。第二次世界大戦終結前後の台湾において、韓石泉は空襲や接収の混乱を経験、戦後には積極的に選挙に参加し、一九四六年には第一回台湾省参議会議員に当選している。一九四七年、戦後の台湾で最も深刻な衝突事件となった「二・二八事件」が発生した際、韓石泉はその事件処理委員会台南分会の主任委員に推挙され、穏便な処理に努め、台南二・二八事件に関する重要な証言を残した。彼はまた地方の社会活動にも積極的に参加し、私立光華女子中学校校長、台南市防疫委員会副主任委員、台湾省赤十字社台南市支会会長等の職務を歴任した（以上、洪郁如解説を参考）。

本書は、基本的には第三版に即し、韓

石泉の生涯に基づいて、回想録の内容を一九章に分けている。第一章から第十章は、日本植民統治期にあてられ、主な内容は家庭環境、学究、恋愛結婚、医業の状況について記述している。第十章以降は中華民国統治期における、時代の変化や政治参加経緯について主に書かれ、全編を通じて家族や恩師、友人に関する記述に溢れている。

この回想録は、特に複数の観点について詳細に描かれ、二〇世紀台湾における特異点を知るうえで重要な手がかりとなる。まずは、西洋式医師の養成課程について、在学時の雰囲気や卒業後の大病院在職時の職場環境、そして開業後の医業や病気に関連する種々の出来事とともに、植民地期における医師が、台湾人にとって最も好まれた職業であったこと、そしてその苦しみと楽しみを窺い知れる。つぎに、韓石泉の恋愛と結婚に関する彼の回想を見れば、当時の台湾における恋愛と結婚を取り巻く環境とその変化について知ることができるだろう。二〇世紀以降、他の東アジア社会と同じく台

湾の人々は工業化、都市化、そして西洋的観念の影響を受け、これまでの人との交友関係は強烈な変化を余儀なくされた。この回想録においては、自由恋愛に関する描写、そして伝統的な結婚に関連する儀式を突破して、親族や友人一同を前に、参列者と共に結婚宣誓書を読み上げていく場面については特に、洪郁如の研究にあるように、新旧の観念が入り混じった二〇世紀初期の台湾を理解するうえで重要な意義を有している。そしてさらに、政治参加の過程についてである。韓石泉の在学時、そして在職した時代は、台湾民族運動が高揚した一九二〇年代であり、その最も重要な運動組織であった台湾文化協会のリーダー、蔣渭水もまた医学学校を卒業した医師であり、こうした雰囲気のもとで、彼は政治運動へと参画していく。一九二三年、台湾総督府は治安警察法違反を理由に台湾議會期成同盟会に関与した台湾人エリートを全島一斉に逮捕した。若き韓石泉もまた、同盟会への参加を理由に逮捕、投獄された。回想録では、逮捕、裁判、そして特

務との渡り合いについてもいきいきと描かれている。終戦後の国民政府の接收、台南市参議会議員選挙への参加と敗北、その後の台湾省参議会議員への当選後の政治的な雰囲気、さらに自身が経験した台南市二・二八事件の処理過程、これらについてもすべて後世に残された貴重な記録である。今日において、戦後初期台南の地方政治や台湾省自治組織の運営状況について読み解くうえで、本回想録は重要な参考資料となる。

洪郁如が「解説」のなかで指摘しているように、本回想録においては、「医師」「世代」、そして「政治」が三つの重要なキーワードであり、本書を理解するうえでの助けになる。本文では、以上のような見方を踏まえたうえで、以下では第二次世界大戦終結前後の歴史的な間隙において台湾人がどのような苦境やチャンスに見舞われたのかについて補足的な説明を試みる。また、台湾政治史上において、地方レベルの「省」単位での自治が置かれた特殊な地位についても併せて説明と整理を行う。こうした苦境や

チャンスの大部分は、帝国日本の崩壊によつてもたらされ、台湾に対する中華民国の位置づけと密接に関連し、これらは共に、今日の台湾を生み出すうえで重要な役割を果たした。

台湾人から見た

第二次世界大戦終戦前後の意義

日本の読者からすれば、戦時期の「疎開」や大空襲のイメージは馴染み深いことだろう。しかし、台湾に関連する戦争最末期の歴史については、台湾においても日本においてもあまり論じられないことがない。日本の植民地として米軍を中心とする連合軍の空襲にさらされたという事実は、戦争の一環とはいえ連合国の一員としての中華民国は、戦後こうした歴史を語ること自体厄介な状況に置かれた。このため、こうした事実について、過去の台湾の教科書には記載されず、歴史研究も豊富とは言えない状況にある。近年、台湾社会においては、歴史意識が台頭しはじめ、大空襲の歴史も見直されはじめた。加えて、アメリカの公文書が

公開され、大空襲に関連した戦闘計画、航空地図、そして写真が次々と発掘され、関連研究はようやく蓄積されつつある。この回想録は、台湾人の観点から、戦時期の支配者と被支配者の緊張関係と、台湾人がこの戦争に対して抱く多様な立場、そして家族の犠牲や空襲の被害にあった診療所の記述を通じて、第二次世界大戦が台湾人に与えた影響の深さを描き出している。この回想録は、植民地と植民地の人々の戦争体験を生き生きと読者に伝えている。

台湾人から見れば、第二次世界大戦の終結は天地がひっくり返ったかのような影響をもたらした。形式的な国籍や政治的な権利のみならず、キャリアの維持にも影響が及んだ。本回想録は、大空襲によつて診療所が灰燼に帰した際、日本人医師が転職を理由に医療機器を韓石泉に売り渡したことで、医師としての生計をようやく維持し得たことにも言及している。これは軽妙かつ淡々とした記述でありながらも、その実波乱に富んでいる。戦後、国民政府の規定により、一九四五

年八月一五日以降、すべての日本人資産（公有・私有を問わず）はひとしく敵産として個人での売買や譲渡が禁じられた。回想録に記載された売買は終戦以前の出来事であり、影響は受けなかった。日本人資産の移転は当時、特に敏感な問題であり、国民政府の植民地期の公有・私有財産の接収政策については、早期から多くの研究が接収過程で少なくない不正が行われたと指摘している。しかしながら、一般民衆のレベルからみて言えるのは、八月一五日の終戦から一〇月二五日の国民政府の台湾接収までの過渡期に、台湾人と日本人間での資産の売買は、わずかに日付が違うというだけで、最も基本的な私有財産の移転は合法から違法へと変わったということである。このときの台湾の人々には、あらゆる公的機関の協力や声明もなかった。かつての植民統治者は、敗戦によって相談者としての立場を喪失したことを自覚していたのである。当時の台湾には、台湾人民を代表するいかなる民意機関や行政組織も存在しなかったのである。

つまり、植民地から独立を成し遂げた他の国とは違い、植民統治の終結後、台湾人と旧植民統治者の関係は、決して台湾人が自ら決定、協議、そして処理をしたわけではなかった。いわゆる「代行された脱植民地化」が生んだ様々な問題は、この回想録の中で彼個人と家族の運命という形でクリアに現れている。

台湾人が議論した台湾の公共政策 ——「省参議會」の意義と制限、限界

前述したように、戦後の復旧活動が多忙を極める中、台湾の各レベルのエリートは積極的に政治活動に参画した。韓石泉本人もまた、診療所が空襲により破壊され、個人の経済的状況が完全には復旧しない状況ではあったが、すぐ選挙に参加した。この回想録は、詳細な政治活動の記録であり、戦後初期の台湾の雰囲気や鮮明に表現し、読者にこの「省」レベルの民意代表機関の意義と直面した限界について考えさせるものとなっている。

一九四六年四月、第一期台湾省参議會議員選挙が行われた。この選挙は間接選

挙で、すでに同年の二月、三月には各縣市参議會議員が選ばれており、その県市参議會が各地の省参議員を選出することになっていた。韓石泉の回顧録によれば、韓は先に県市参議會議員選挙に立候補、落選後、台南市参議會によって省参議員として選出されたことがわかる。この省参議會は、初めての「省」レベルの民意機関である（次頁表1参照）。

台湾省参議會議員は間接選挙で選出されるものではあったが、台湾人が政治的権利を持ったのは、はじめてのことであった。この省参議會は、政府によって任命されたメンバーではなく議員全員が台湾人から選ばれ、台湾全体の民意を反映したものであったと言える。この権利は、日本統治時代には享受し得なかった権利であった。一九四六年当時、政治に参加し、公共政策について議論していた台湾人は、台湾省参議會についてみれば、おのずと日本統治時代に十数年あまりも争っていた「台湾議會」を思い浮かべただろう。民主主義を長年にわたって学び、想像し、争い、日本植民政府の抑

表1 戦後初期台湾で行われた選挙の選出方法

	選挙のレベル	選挙時期	選出方法
A	村里長、区郷鎮代表、県轄市市民代表	1946年2・3月	直接選挙
B	県市参議会議員	1946年3・4月	A及び職業団体による
C	省参議会議員	1946年4月15日	Bによる
D	国民参政員	1946年8月16日	Cによる
E	憲法を制定する国民大会代表	1946年10月31日	C及び職業団体による
F	区长副区长、郷鎮長副郷鎮長	1946年11・12月	Aによる
G	第一期国民大会代表	1947年11月21-23日	直接選挙及び職業団体
H	第一期監察委員	1947年12月	Cによる
I	第一期立法委員	1948年1月21-23日	直接選挙

庄もなくなつたことで、ようやく台湾人は自分たちの「議会」を獲得した。これにより、「台湾人が台湾のことを議論する」という悲願を達成したという考えを持った人は少なくなつたであろう。旧台湾教育会館で起立して発言した省参議会議員は、歴史の舞台で活躍しているという自覚を持つていただろう。そして、台湾の歴史を意識し、未来に自信を持つという想いは、終戦直後、あるいは二・二八事件前の台湾において特別な雰囲気をもとつていたと推測できる。

もう一つ、戦後台湾における特徴は、比較的自由な言論空間があつたということである。終戦直後の台湾では、雑誌と新聞の新たな発行が爆発的に増加し、多様な立場の政治論説があふれ、世論も省参議会の言動に注目するようになった。回顧録によれば、報道関係者は自らの立場と近い省参議会議員を支持し、立場が異なる省参議会議員を批判することもあつた。つまり、当時の台湾人は省参議会に関連するニュースに注目し、マスメディアが社会と省参議会との橋渡しに

なつて、両者の距離を近づけたのである。二・二八事件以降の戒厳状態にある台湾人からすれば、この時代の言論空間は想像できないほど自由な状況であつた。

以上のような状況について、民主主義と自由権の側面から考えると、一九四六年に成立した省参議会の「政治的実験」は重要であつたと考えられる。東アジアの近代化と民主化という観点から見れば、脱植民地化したばかりの台湾と憲法の施行を準備していた中華民国、そして帝国主義時代が終わつたばかりの日本にとって、省参議会の民主主義の模索と以後の歴史の流れには、大きな意義があると考えられる。

しかしながら、戦後の「台湾議会」には制限があつた。簡単に言えば、省参議会議員の選出方法と政府からの干渉、そして省参議会議員の職権を見れば、行政機関を監督する「議会」とはとても言えない状況であつた。前述したように、省参議会議員は各県市参議会により選出されたが、実際には県市参議会議員も間接

選挙による選出であった。つまり、省参議会は台湾人を代表するという正当性にも制限があった。また、政府からの干渉により、省参議会議員の任期と定員数、立候補の資格などは全て変更された。

省参議会の職権をみると、省参議会は台湾省長官公署に対する決議提案権しか持つておらず、長官公署は議会から出される決議案を受け入れ、執行する義務は持たなかった。また省参議会は基本的な予算審査権を持つているのみで、長官公署官吏の任命同意権すら持つていなかった。二二八事件処理委員会の政治的要求は、省の自治法の制定、県市長直接選挙の実施、省政府の処長任免については省参議会の同意を必要とする、というものであった。こうした要求からは、当時の台湾人が、「地方自治」における民主主義が未成熟であることを熟知しながら、省参議会の政治的な権力を強化したいという願望があったことが見てとれる。

以上を総括すれば、省参議会には多くの制限がありながらも、台湾人がこの

チャンスをしつかりとつかみ、これを出発点として民主主義を実現していこうと試みていたことが明らかになる。戦後初期、台湾社会にはエリートと中産階級が政治に情熱を傾け、台湾を建設せんとする特別な雰囲気があった。こうした雰囲気の中で、当時の人々はみな選挙活動に参加するようになったと考えられる。

予想外の発展

——省参議会の後世への影響

(一) 中華民国に対して

一九四六年、台湾で行われた選挙は、国民政府の訓政時期の法律により、中華民国の他省と同様のものではなかった。台湾接收後初の統治機構であった長官公署は、台湾に対して他省とは異なる「特殊化」政策を採用し、強大な権力を持つようになつた。しかしながら、この「特殊化」政策の下、国民政府は台湾を「内地化」し、台湾を中華民国の一省とすることを念頭に置いていた。そのため、長官公署以外の制度は可能な限り他省と同様のものを採用した。また、台湾で民主主

義を実施し、日本統治時代と比較して台湾人を厚遇することを明らかにすべく、国民政府は、行政監督権を付与しない地方議会の選挙を積極的に推進した。こうした思考は終戦直後のみならず、一九九二年まで続くことになつた。

一方、「台湾人に地方自治の権利を提供する」という政治宣伝の下、国民政府はしばしば台湾を「特殊化」し、他省が有していない政治的権利の付与を承認することもあつた。回想録にあつた興味深い場面を紹介しよう。

二二八事件のうねりに遭遇するなかで、行政長官・陳儀は各県市長を民選によつて選出することを承認した。このため、台南市各界の代表が集まり、新しい台南市長を選出し、韓石泉は二六票を獲得、当選した。

この候補者選出の投票前夜、出馬意欲のある人士たちは、市長の座を夢見て激しい選挙活動を展開した。思いもよらなかつたことに、候補者選出が終了した直後の翌日(十日)、陳儀長官は台湾全省に戒厳令を敷

き、二二八事件処理委員会に対し解散を命じた。ここに至って、市長選挙が水泡に帰したことを知った。

(二五一一―一五二頁)

ところが、事件後台湾に渡航した国防部長も県市長の民選を布告した。その後、韓石泉はあきらめず省主席・魏道明に県市長選挙の実施時期について質問したが、魏道明は、陳前長官に民選の決定権があったことを疑問視する返事をした。実際のところ、当時の法律によれば、中華民国の全省においては、県市長を民選によって選出することはできなかった。以上のケースから、二・二八事件発生時、陳儀が台湾人を欺いたという事実と、中華民国政府は政治情勢によって「特殊化」と「一般化」という両面の政策をとっていたことがわかる。

(二) 台湾に対して

省参議会をはじめ、後の台湾臨時省議会と台湾省議会は、「反乱鎮定動員体制」つまり反共戦時体制下において、一九九二年まで台湾全域を代表し、定期的に全面改選する唯一の民意代表機関で

あった。この機関は、台湾の政治に対して以下のような影響を及ぼしたと考えられる。

第一に、「台湾大」という政治共同体

を徐々に生じさせたという点である。「台湾省」という名のもとで、地方選挙が行われたが、当時の台湾と中華民国は統治範囲がほぼ同様であったために、若林正丈の指摘する「中華民国台湾化」の基礎となった¹⁾。

第二は、「台湾大」の政治共同体が出現したからこそ、台湾アイデンティティも生まれることになった。最も重要なのは、この「台湾大」の政治的空間は、政府が憲法を施行し、「地方自治」を実現していることを内外に証明するための場であったため、議会における発言と選挙運動は、憲法規定上ある程度容認されなければならなかったのである。

第三に、数多くの制限はありつつも、この政治的空間は、体制下で国民党政府に挑戦し、野党を結集し、本省人及び外省人政治エリートが協力する土台ともなった。一九五〇年代中期以降、外省人

の雷震(元国民党の政治家)と本省人の李万居(省参議会副議長、省議員)、郭国基(省参議員、省議員)が接近した理由は、省議会議員選挙を含む地方選挙の問題でもあった。また、雷震などの新党結成運動が失敗してから一九七〇年代の「党外運動」まで、省議会は、国民党以外の意見を補充する重要な政治空間であったと言える。

以上の三点をまとめると、一九四九年以降、中華民国体制下で、台湾という「地方」がほぼ「中央」と同様の存在にまで成長し、「台湾」は次第に政治的空間を構築し、省レベルの議会であつても、政治的権利を要求、行政権を監督する民意代表機関となったのである。このような発展は、政府側が想像した以上の結果を残した。台湾の民主化は、こうした、「予想外の空間」で発展したものであつた。

こうした歴史的発展の出発点となつたのは、まさに韓石泉が参加した省参議会だったのである。

結論

歴史研究者にとつて、回想録は魅力的でありながらも、解読をする上ではまた多くの困難を伴っている。回想録は、形式という面から見れば、ひとつひとつ物語の集合体のようでもあり、物語の選択、前後関係の解釈、そして時事的な出来事や人物に対する評価は、回想者の主観的な意見にあふれている。こうした主観性によつて、この回想録が書き留めている事象は、かならずしもすべてが正確とは言えない。しかしながら、この回想録は筆者が社会の人々に明らかにしたい、重要な人生の物語を提示しえ、回想録が持つ個性は、歴史を単なる公的な宣伝、あるいは白黒がはっきりとした存在から開放し、多面的、多面的な容貌を見せるものへと昇華する。回想録は当時の時代的、空間的な条件を反映するとともに、筆者が公開したい、公開しうる出来事と表現形式を決定する。読者がいかに回想録を読み解くかも、回想録の筆者と同じく、置かれた場所と時間、そして文

化的な背景に依存している。この回想録の長きにわたる、幾度も重ねた出版の歴史そのものが、韓石泉とその家族が何かを伝えたい、伝えようとする熱意がいかなるものかをよく表したものとさえいう。拙稿は、第二次世界大戦前後における台湾人の状況と、戦後台湾人の政治参与と空間という観点から、日本植民統治の影響を補足するとともに、今日の台湾に至るまでの道のりを読み解くものである。では、現代の日本の読者は、またどのような観点からこの回想録を読み解くだろうか？ 改めて読者に問いかけることで本稿を閉じることとした。

注

- 〔一〕 若林正文『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、二〇〇八年、一―二三頁。